

華嚴經に見られる中道の論理

——華嚴經と新羅の義湘——

陳 永 裕

1. 始めに

華嚴の円融思想は即ち不二の意味を持つことになり、これはまた中道の意味とも相通じていると考えられる。特に十地品第六現前地に入るためには、十の平等法が説かれる。即ち、一切法の無相、無体、無生、無滅、無戲論、有無不二等である (T10.63a)。これらの経文の中で‘有無不二’からはまさに意味的に中道の義を読み取ることができる。また、‘平等’という言葉を持ちいて‘中道義’を顕わしているとも言えよう。また、このような華嚴の中道的思想の流れは、中国を経て新羅の義湘の華嚴教学に著しく現われていると指摘することができる。中でも義湘の言っている中道の意味を通して華嚴中道の特性を考察していきたい。

2. 華嚴經の中道的表現

『華嚴經』で中道と脈を共にする言葉を探していくと平等、不住道行などを先にあげることができる。また、中道を現わす思想としては不生不滅と無住、相即不二、無自性などをあげることができる。「光明覺品」では一と無量、「須弥頂上偈讚品」では‘一切法を觀察してみると自性は無所有ですべての生滅相は仮名であるにすぎず一切法は無生無滅’と言う。また、眞実慧菩薩の偈頌では一切法の無相、無住を説いている (T10.81c)。

ここでの仮名と不生不滅などの表現は『中論』の文句を連想させる。「夜摩天宮偈讚品」でも一切法の無生無滅を説いている。

また「十行品」での菩薩行を船師、即ち船子に例えたのはまさに不住と無二の境地を現わしたものである。菩薩が生死の此岸と涅槃の彼岸、あるいは中流のいずれの一方所にもとどまらず、一多、生滅、増減、有無、二不二のいずれにも取着しない理由は、菩薩は法界が無二であることを悟るからだと言う (T10.106c)。「十忍品」第四如幻忍では菩薩は三世平等を悟るものの果てしなく衆生のために三世

(20)

華嚴經に見られる中道の論理（陳）

を分別し、機根にしたがって衆生を済度するが法界が平等であることを知り、言説が不要であると知りながらも、絶えず言説をもって法を説くと言う。経文の偈頌では寂滅して戲論がないことを強調している（T10.232c, 235c）。即ち、龍樹が重要視した戲論寂滅である。

さらに「十地品」によると第四地の菩薩が第五地に入るためには十種の平等清浄心を備えなければならない（T10.191b）。

そして第六地に入るために欠かせない十平等法は、その内容をよくみると無相、無体、無生、無成、本来清浄、無戲論、無取捨、寂静、如幻如夢如影如響如水中月如鏡中像如焰如化、有無不二であるため平等だと言う。これらの内容はそのまま中観思想で中道を現わす言葉と同一の内容を表している。したがって『中論』で中道の概念を明らかにする最初の行にある不生不滅と戲論寂滅などの言葉は上の文と内容的に同じであると言える。また、第六地の菩薩行を完成した後は第七地に入ることになるが、その時菩薩は以下の十種の両辺に偏らない行を実践するようになる。引用すると以下の通りである。

菩薩はたとえ空無相無願の三昧をよく磨いても慈悲で衆生を捨てず、たとえ諸仏の平等法を得ても、むしろ常に諸仏に供養することを好み、たとえ空智を貫く門に入ってもむしろ手まめに福德を集め、たとえ遠く三界を離れてもむしろ三界を莊嚴して、たとえ畢竟にすべての煩惱の火焰が寂滅しても、むしろ充分に一切の衆生のために貪瞋癡の煩惱の火焰を起こして滅ぼし、たとえすべての法が幻のようで夢のようで影のようでこだまのようで花火のようで移り行くもののようで水中の月影のようで鏡中の姿のように自性が二つでないことを知っても、むしろ心に従い業を作ることを限りなく差別し、たとえ一切の国土が虚空のようなものと分かっても、むしろ充分に清浄妙行で仏土を莊嚴し、…（T10.196a）

上の引用文で見ると、華嚴の中道は反語法的な表現を用いて、二辺を離れた菩薩の中道実践を強調したことにその特性があると言える。たとえ徹底的に三空三昧の境地を体得しても、むしろ衆生のために慈悲を実践する有為行を捨てないということから始まり、すべての対立を乗り越えるのが即ち菩薩行であることを明らかにしている。仏の音声为空寂であることを知っても、むしろ衆生のために種々に差別した音声を出すということはまた『中論』の二諦中道の思想に酷似している。真諦を現わすことがすべての仏様の本来の目的だが、衆生を導くためにはやむを得ず俗諦を要するという理論と相通する部分がある（T30.32c-33a）。

「如来出現品」では如来の成正覚を説く経文に以下のような文がある。

仏子よ、菩薩摩訶薩が当然知らなければならない。如来成正覺は一切義にところなく觀察し、あの法に平等で疑惑することなく、無二無相、無行無止、無量無際し、遠く二辺を離れて中道にとどまりながら一切の文字言説を脱している（T10.275a）。

上の文は如来の成正覺をまさに中道で表現した経文である。また、経文では如来が正覺を成す時に限りない仏身を得て、まさにその仏身を通じて一切衆生の成正覺を見て一切衆生の入涅槃を見、一切智を得て大悲が相續し衆生を救済するようになるということだ。

「離世間品」では菩薩摩訶薩が、涅槃の境地は一切の戲論分別を脱していると考えられるが、むしろ衆生のために間断なく妙行を磨き、一切衆生が空しく無所有であることを知るが、業果を崩さず、たとえ如来の一切智地に入ったとしても、むしろ菩薩行を決して捨て去らず衆生を調伏して教化すると言う（T10.279a-b）。これは無為の境地を知りながらも衆生のために有為の行を捨てないことが真の菩薩道であると現わしている。また、十種平等と十種仏法実義句では平等の意味と十種実義として一切法但有名と一切法猶如幻、一切法猶如影、一切法但縁起、一切法業清浄、一切法但文字所作、一切法實際、一切法無相、一切法第一義、一切法法界（T10.283a）などの経文も注意深く読まなければならない。

また、十種境界無碍用でも両辺にかたよらないことを無碍の作用と書いている（T10.294b）。続く十種仏業の第十仏業でも本来空寂を知りながらも福德と智慧を尽きることなく磨き続けるなどの経文からまさに中道の論理が展開されていることが分かる（T10.308b）。

このような中道的論理は「入法界品」でも見つけることができる。善財童子が瞿波女善知識を参拝し質問した内容も中道の論理として理解することができる（T10.406c）。また善財童子が弥勒菩薩の毘盧遮那莊嚴藏大樓閣の前で、この大樓閣は‘一切法の無生を悟ってからも無生の法性にとどまらない者の住处’（T10.423c）と言うなど、この大樓閣にとどまる者の証得した境地をやはり中道の論理として説いている。また、弥勒菩薩は善財童子にどこから来たのかと尋ねられると、「諸菩薩は無来無去、無行無住、無処無着、不没不生、不住不遷、不動不起、無恋無着、無業無報、無起無滅、不断不常などから来た」（T10.438a）と答えている。これは総体的に不二と中道を表現する経文と言える。最後に「入法界品」の無尽灯の比喻は一つの灯が限りない灯になり、一瞬にして百年千年の間続いて来た闇を一気に明かす理を言っている。この経文は菩提心の灯が空間と時間に関わらず不二と無住を現わしているものと解釈できる（T10.432c）。

(22)

華嚴經に見られる中道の論理（陳）

このように『華嚴經』には菩薩道の重要な行法として不二の中道の論理が随所で発見されていることが分かるのである。

3. 義湘の華嚴中道

華嚴教学で中道を論じる際には誰よりも先に新羅の義湘（625-702）の華嚴教学を思い浮べる。義湘は彼の著書『華嚴一乘法界図』（以下『一乘法界図』）で義湘が使った‘陀羅尼’という言葉の頻度数と同じくらい多くの部分で‘中道’を重要視しながら取り上げている。義湘が主張する中道の内容をまとめると以下の通りである。

『華嚴一乘法界図』	大正蔵第 45 卷
1) 以陀羅尼無尽宝 莊嚴法界実宝殿 窮座實際中道床 旧来不動名為仏	711a
2) 何故始終兩字 安置当中 表因果兩位法性家内真实徳用 性在中道故 字相如是 問 上云因果不同 一家実徳 性在中道 未知所由。其義云何	711b
3) 如綵相別相成相壞相等 不即不離 不一不異 常在中道 一乘三乘 亦復如是 主伴相資 不即不離 不一不異 雖利益衆生 而唯在中道 主伴相成 顯法如是	711c
4) 答 若約情説 証教兩法常在二辺 若約理証教兩法旧来中道 一無分別 所以得知遍計無相 依他無生真实無性 三種自性常在中道 三法以外 更無証教 是故当知 一無分別 是故至人得此理故 名相不及 為生説故 言在事中 故經偈云 一切諸如来 無有説佛法隨其所応化 而為演説法即其義也	713a-b
5) 何況三性以外別有三無性 所以得知無相等智現前 畢竟無法可対 唯在中道故 是故須解教立所由	713b
6) 是故一切法本来在中道 中道者通言非言 何以故 諸法実相 不在言中 離名性故 言説法不在真性 在機益故 名無真性 離名性故名而無名 名而無名故 以名求实 实不可得 名無真性故 名而無我同故名 性不可得 以此義故 二俱不可得 唯証所知 非余境界	713c
7) 問 前後兩義何別 答 前義可別 以本末相即 相即相融顯中道 後義以名義互為容 顯無我義 所顯道理不理 能詮方便別 此即本末相資 名義互 * 容 開導衆生 令致自無名真源 能化所化宗要在此	713c
8) 謂陀羅尼者 綵持故 如下数十錢法中説 實際者 窮法性故 中道者 融二辺故 坐床者 撰一切故 安在法界十種涅槃広大宝床 撰一切故 名曰坐床 宝者可貴故 床者即撰撰義故	714a
9) 若依一乘如実教門 不尽其理 理事冥然 一無分別 体用円融 常在中道 自事以外 何処得理	714b

10) 一切縁生法無有一法定相有性 無自性故即不自在者 即生不生不生者 即是不住義 不住義者 即是中道 中道義者 即通生不生故龍樹云 因縁所生法 我說即是空 亦説為是假名 亦是中道義 即其義也 中道義者 是無分別義 無分別法不守自性故 隨縁無尽 亦是不住 是故當智 一中十 十中一 相容無礙 仍不相是 現一門中具足十門 故明中智 一門中有無尽義 如一門 余亦如是	714c
11) 又問 何故在年月名 答 示一切諸法依縁生故 又問 縁從何處來 答 從轉倒心中來 轉倒心從何處來 從無始無明來 無始無明從何處來 從如如來 如如在何處 如如在自法性 法性以何為相 以無分別為相 是故一切尋常在中道 無非無分別 以此義故 文首詩 法性円融無二相 乃至旧來不動名為仏 意在於此。	716a

上で見るように義湘は中道を『一乘法界図』で主要な用語として用いていることが分かる。上の内容をまとめると、1) は中道の床に坐って旧来から不動なるを仏と呼んだのは、最高の価値である仏を中道として合一させ動揺のないことを現わしたものである。2) は「法性偈」の始まりである最初の‘法’の文字と最後の‘仏’の文字が海印図の中央に来るようにしたのは法性の徳用が中道にあることを現わしたものである。3) は六相の円融などの二辺の対立を越えた境地が即ち中道であるという意味であり、4) と5) は唯識教学の三性に対する三無性が無差別であることを中道から悟るようになるためである。6), 7), 8) は諸法実相は言説を離れており、それでいて相即相入して二辺を融摂する中道の理を現わしている。9) と10) は理事が渾然一体である無分別理の自体が中道であるため、即ち自性を固守せず差別性を論じられるとみたわけだ。11) は法性の如々たるはまさに無分別である平等一相だが、それもまた中道から得られるとみている。『一乘法界図』のすべての重要な概念が中道として定義され、義湘が意図した法性円融の窮極的な現われが中道であることが分かる。

義湘の華嚴教学を考察するにおいては『一乘法界図』が最も重要な文献となる。この文献で‘中道’が大縁起陀羅尼法と双壁を成す中心キーワードの一つである。したがって、この中道の論理を通じて義湘の華嚴教学を考察することができる。義湘は法界のすべての現状を法性の縁起と観照し、観照された現状の理法を中道で現わそうと努めた。智儼と法蔵の多くの華嚴関連文献と比較してみるととりわけ義湘の『一乘法界図』には中道が重用されていることが分かる。また、この『一乘法界図』は、義湘が華嚴教学の要義をまとめて師匠に認可を得た文献だと、この文献で強調していることは、まさに師匠智儼に認可を得た義湘の華嚴教学の核心であると言える。

義湘の師匠である智儼が単に同別二教判を通じて教学体系の融会を図ったとすれば、義湘は法性の円融を大前提として掲げ法性の特性を縁起陀羅尼法だと定義する一方、これを実践し具現してみせる方法を中道の実践から導き出そうとしたと考えられる。彼の‘性在中道’、‘三種自性常在中道’、‘畢竟無法可對唯在中道’、‘是故一切法本來在中道’、‘相即相融顯中道’という表現などがこれを裏付けている。すなわち「法性の円融はその根本が中道にあるからだ」と解釈できる。

義湘は法界に遍満している不可思議な理法を‘法性’という用語で現わし、この法性の全宇宙的姿が縁起陀羅尼法であるとみている。彼はまたこのような法性は根本的に円融して二つの姿がなく（法性円融無二相）、古くから不動な仏そのもの（旧來不動名為仏）であると要約している。したがって、義湘はすでに顕現しているこの法性をどのように体感し、表出するかの問題を中道から探しているわけだ。法性を体得するためにはまず最初に皆が中道の平床に坐らなければならない。法性を追求するにおいて真実の徳用は根源的な問題を中道から探す必要があり、その中道は六相の差別や即と離、一と異を脱して主と伴が相成する中道の標榜にあると言う。

また義湘は、唯識教学で主張する三性の無相、無生、無性の三無性もまた中道の顕現以外の何物でもないと言う。一切法がすべて中道として表出されるため中道という言葉を使用するが、言葉の中に中道があるわけではない。ただ仮名であるだけなため相即相融の実践が求められ、果てしなく生滅の二辺に偏ろうとする衆生心を導いて不生不滅の理を悟る無分別の如々な境地に上ろうとする実践が求められる。

義湘は修行者が法性縁起の理法を体得するためには無分別を自ら実践しなければならないが、その中心にある思想が即ち中道の具現であったとみている。華嚴の教学体系以上に実践を強調した新羅華嚴の特徴が、義湘の中道の強調で完成されたと言えよう。中道を強調した義湘の思想をいくつかの項目でまとめると以下の通りである。

第一に、法性円融の具体的な意味を中道として標榜している。第二に、中国の法蔵が華嚴教学の‘立教開宗’に根本意図を置いていたとすれば、義湘は華嚴教学の中道実相を把握し実践に移すことが主な目的だったと言える。第三に、縁起法の重重無尽な差別現象は中道の実践によって平等一如を具現できたわけだ。義湘は自分の「法性偈」を解釈する文で自利利他の修行を通じて行われる「得利益」から‘窮坐實際中道床’と詩文を書いた。そして、その解釈で「実際と言うのは

法性を尽くすからであり、中道と言うのは二つの先を融合するからであり、平床に坐るというのは一切をすべて摂受するからである。」と説明している (T45.714a)。

4. 結び

以上から華嚴の『華嚴經』の經文と義湘の『一乘法界図』を中心に華嚴中道について考えてみた。いくつかの項目で内容をまとめると次の通りである。第一に、『中論』における八不中道や二諦中道は対立を乗り越え諸法の実際義を現わす方に中道の論理が使われている。第二に、觀四諦品における中道義は、因縁所生法は空無であり仮名であるため実体がないことを表わすための中道である。これに比べ華嚴の中道は相即円融を基本とし、菩薩道を修行するにおいて二辺に偏ることを戒め、果てしなく法性円融としての中道の実相を悟らせるためであったことが窺える。第三に、『中論』が中道の理論体系を立て縁起の理法を觀察し戲論を寂滅させようと努めたことと、華嚴中道での無戲論と諸法の平等を追求したことは互いに相通ずる部分だと言えよう。そして、華嚴の中道は反語法的な表現を用いて二辺を離れた論理の中、菩薩の中道実践を強調したことにその特性があると言える。

〈キーワード〉 華嚴, 中道, 義湘

(中央僧伽大學校教授, 仏教学博士)